

新潟県における積善組合巡回文庫の活動 —報徳会との関係を考慮に入れて—

前川 香

巡回文庫は、アメリカの図書館学者メルヴィル・デューイ (Melvil Dewey ; 1851-1931) によって提唱されたサービスで、数十～数百冊の本を箱に詰めて学校などの施設へ送付し、複数の場所を巡回させるものである。日本では 1902(明治 35)年に佐野友三郎(1864-1920)が主体となり、当時彼が館長を務めていた秋田県立図書館において初めて実践され、その後、明治後期から昭和にかけて図書館サービスとして全国規模で広く実施され、また、新聞記事としても取り上げられるなど、当時の社会でも関心をもたれていた事業である。

本論文は、このような巡回文庫の中でも、1897(明治 30)年に新潟県の地主層を中心として結成された積善組合が、1908(明治 41)年に開始した巡回文庫(積善組合巡回文庫)を対象とした研究である。この活動は、従来おもに注目されてきた、戦前の行政や図書館が実施した巡回文庫と比べて、地域の自発的な団体によって推進されたことに特徴がある。本研究では、積善組合と報徳会との関係を考慮に入れつつ、この活動の性格を明らかにすることを試みた。

研究方法は文献調査である。先行研究を踏まえつつ、積善組合やその巡回文庫の活動について残存する当時の文献史料や統計資料を収集し、それらにもとづいて研究を行った。また、中央報徳会発行の雑誌『斯民』に投稿された積善組合の活動報告などと突き合わせてみていくことで、積善組合と報徳会との関係を追うこととした。

研究の結果として以下のようなことが分かる。積善組合の結成当初における活動内容は民衆への貯蓄推進と救済という経済面での支援を中心とするものであり、その働きは地域の公益機関として高く評価されていた。組合の活動は、他県と比較し知識水準が低いといわれた新潟県において日露戦争後における社会の改良・再建を目指す官製の運動であった「地方改良運動」を民衆の側から支える役割を担っていたといえる。当時、新潟県内にも図書館は存在していたが、それらは都市部に限定され、農村部では読書にとって困難な環境にあった。そうしたなか、積善組合巡回文庫は、農村部に図書を巡回させることで、農村民にとって読書を身近にしようという思いがあった。このことは巡回された図書の主題からもうかがえるもので、民衆が興味を持ちやすい図書が多いことが明らかとなった。報徳思想を活動の基礎に敷いて産業の振興のため公益事業を展開した積善組合の巡回文庫であったが、民衆を対象とした思想善導としての側面だけでなく、農村地域の民衆のあいだにおける読書習慣を形成する運動としての側面がこの研究では明らかにされたと考える。

(指導教員 原 淳之)